

Special Essay

空に墜ちる

麻醉学講座
渡邊 誠之

最近仕事を言い訳にして読書とは縁の薄い私ですが、自分と本との関わり思い浮かべると中学から高校時代にあこがれて読んだ講談社の“ブルーボックス”シリーズを最初に思い浮かべます。多くの皆さんはもちろんご存知だと思いますがあえて紹介させていただきます。“ブルーボックス”シリーズでは1963年から出版され始め、次々と幅広い内容のタイトルで現在871冊までその数を延ばしています。その当時では珍しく“一般相対性理論”や“量子力学の世界”など科学に関するいろいろなテーマを一般大衆向けに平易な言葉でわかりやすく説明していました。いがぐり頭だった当時の私の理解度はともかく“タイトル”を見るだけでわくわくしてくるような本です。例えばこの宇宙を宇宙船に乗りただひたすらに真っ直ぐ飛び続けるといつの日か自分のいた銀河系に戻るといった“閉じた宇宙”についての話や“光速に近い速度で宇宙旅行をすると宇宙船の中の時間の進む速さと外の世界との時間の進む速さが異なり”浦島太郎効果”が起こるなど、当時（今も）未熟な私にはこのSF小説もどきの本はとても刺激的であり、読みながら空想の世界に入るのがとても気に入っていたことを思い出します。その後、医学部に入り、医師になり、日々のあまりに現実的な実務に追われる生活が続きいつの間にかこのような本とも疎遠になりました。しかしながら、少年時代に自分の理解を超える事象について思考し想像する経験は現在の仕事においても私の探究心の根幹になっていると思います。残念ながらブルーボックスの多くは旭町図書館ではなく御井図書館に所蔵されています。そんなに高い本ではありません。興味をもたれた方はぜひ一度手にとってご覧ください。得意な分野に豊富な知識をお持ちの先生方でも専門領域以外で新鮮な知識を得られること請け合いです。

最後に晴れた日に野外で寝転びながら本を読み、ふと青空を見上げると宇宙(空)に墜ちていきそうな感覚に陥るのは私だけでしょうか。

